

先日、米国から出張で戻ってきた人が、次のような感想を述べていた。「米国でビジネスや政府の現場にいる人と話をしていて、誰と話しても米中分断の現実を深刻に受け止めている。ところが、日本に戻っていると、ビジネスの人々のこの問題への感度が鈍すぎるように感じる」というものだ。日本のビジネス社会の感度が鈍いかどうかはさておき、米中の対立は経済全体に影響が及ぶ深刻なものであると考えるべきだろう。

1989年にベルリンの壁が崩壊してから、世界はフラット化の道をずっと歩んできた。フラット化とは、米国のジャーナリストであるトーマス・フリードマンのベストセラーから広がった表現である。要するに、世界中で貿易や投資の障壁が軽減され、グローバル化の流れが広がっていったといふことだ。

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

論壇

そうした中で中国が重要な位置にあったことは言うまでもない。2001年に中国はWTO(世界貿易機関)に加盟した。WTOは貿易障壁を撤廃することをその使命としてきた。要するに世界経済のフラット化を進める原動力であった。そのWTOに加盟してからの中国の経済成長のスピードは目覚ましく、世界の多くの国も中国に対する依存度を高めて

Uターンしてしまったようだ。つまり、フラット化する世界とは別の道を歩み始めたようであるというのだ。この頃から、つまり10年ほど前から、米中分断が少しずつ始まったのかもしれない。2015年、つまり7年前には、ハーバード大学のアチソン教授が米中は戦争に突入するという論評を出し、世界の多くの識者

フラット化と米中対立

ていった。

そのフラット化の流れが今、大きく変わりつつある。米国の高官がある国際会議で発言していた。「中国のWTO加盟で、われわれは中国が国際社会に調和して自由で開かれた社会になることを期待していた。当初は中国もそうした動きを強めていたが、10年ほど前から、その中国は

の注目を浴びた。トランプ政権の時代には貿易問題で米中是对立し、そしてバイデン政権下では台湾問題で米中の対立が表面化している。こうした流れの中でグローバル経済のフラット化は見直されようとしている。グローバル化が止まってしまうわけではない。米中分断という現実を取り込んだ分断型のグローバ

ル化が進んでいく流れになりそう

だ。半導体で起きていることを見れば、米中分断の中でのグローバル化の姿が分かりやすいかもしれない。

米国は中国が日本や韓国から半導体がらみのハイテク製品を輸入することを牽制しようとしている。米国での半導体生産強化を進めるとともに、日本や韓国との連携を強めようとしている。中国は、米国に頼らない形で半導体の生産基盤の強化を図っている。そうした中で、台湾は自分の立ち位置を探っている。

グローバル化にもいろいろなパターンがある。これまで私たちが見てきたのはフラット化したグローバル化であった。これからはそのフラットな構造の中に亀裂が入り、分断化したグローバル化に姿を変えていくことになりそうだ。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。